

I. 研究主題

心うごく瞬間（とき）をもとめて

～音楽的な見方・考え方を働かせ、表現する力を育む指導の在り方～

II. 研究目的（3年次計画の1年目）

1. 研究経過

令和5年度からの3年間、「ときめき つながり ひびきあう心を」を研究テーマとして実践を積み重ねてきた。表現及び鑑賞の活動を通して、他者と協働しながら思考を深め、様々な価値観に触れながら、多様な学習活動を展開してきた。また、音楽活動の楽しさを体験することにより、音楽や人とのつながりへの気付きやときめき、さらには心をひびきあわせる経験へとつなげることができた。こうした実践を通して、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しむ心を育てることを目指してきた。

研究当初は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、歌唱や合唱、管楽器等、各校で中心的に行われてきた表現活動に大きな制限が生じた。その影響により、子どもたちの技能や表現力の低下を実感する場面も多く見られた。しかし、感染状況が徐々に落ち着くにつれ、子どもたちが生き生きと音楽活動に取り組む姿が再び見られるようになった。

研究授業においては、小学校・中学校ともにICTを活用した多様な活動を取り入れ、個別最適な学びと協働的な学びの充実を図りながら、研究主題に迫る授業を展開することができた。その成果として、ICTの活用により、グループワークでの意見交流や振り返りの場面において、子ども一人一人の考えを把握しやすくなるという利点を再確認した。最終年度となった昨年度は、こうしたICTを含む協働的な学びをさらに発展させ、子どもたちの思考や判断を大切にしたい授業づくりを進めることができた。

また、対面で行う全体会や合唱交流会、小・中合同による協働研究の意義を改めて実感する機会にもなった。学習会では、各市町村部会において十分に協議・検討された、今日的な教育課題を意識した実践発表が行われ、研修の深まりが見られた。さらに、小・中学校の座談会では、音楽科教員が抱える困難さや課題をはじめ、各校の実情や具体的な実践例を交流し、今後の授業の在り方を考える貴重な学びの場となった。

今後は、生成AIをはじめとする新たな技術が、教育現場にも一層浸透していくことが予想される。そのような時代において、音楽科教員は、人間だからこそ伝えることができる音楽の価値を担う重要な存在である。ICT等の「道具」を効果的に活用しながら、子どもの創造力や感性を育み、音楽の本質を伝えていくことが、これからの音楽教育に求められる大きな使命である。今後も、めまぐるしく変化する社会情勢や今日的な教育課題を踏まえ、柔軟に教育課程を編成していく必要がある。

2. 主題設定の理由

中央教育審議会答申では、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのように社会や人生をよりよいものにしていくかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けることが重要である」と示されている。

この考えを受け、音楽科では、学習指導要領改訂の基本的な考え方として、「感性を働かせ、他者と協

働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや美しさを見いだしたりできるよう、内容の改善を図ること」や「音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化について理解を深める学習の充実を図ること」が示されている。

また、学習指導要領では、音楽科の目標を「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽（音楽文化）と豊かに関わる資質・能力を育成すること」〔※（ ）内は中学校の目標〕とし、学習指導要領解説音楽編においては、「客観的な理由や根拠をもとに友達と交流し、自分の考えをもつことで、音楽表現や鑑賞の学習を深めていく過程に音楽科としての学習の意味がある」と述べられている。

では、音楽活動において、子どもの心が大きく動く瞬間とは、どのような「とき」なのであろうか。小学校では、「わかった・できたと実感する瞬間」「やってみたい、もう一度聴きたいと感じる瞬間」「認められた、仲間と心が一つになったと感じる瞬間」等が挙げられる。また、中学校では、「基本的な技能が向上したと実感する瞬間（達成感・有用感）」「新たな見方や考え方に気づき、音楽の世界が広がったと感じる瞬間」「音楽的諸要素を聴き取り、感じ取ることができた瞬間」等が挙げられる。

このような瞬間に出会ったとき、子どもたちは「目を輝かせる」「体を動かす」「表情を変える」「つぶやく」「口ずさむ」「友達と顔を見合わせる」「拳手して伝えようとする」等、それぞれの発達段階に応じた方法で、自身の心の動きを音や言葉、態度で表現しようとする。また、子どもの心が動くその瞬間は、指導者が次の手だてを構想する重要な契機でもある。

音楽の授業の中に、こうした「心が動く瞬間（とき）」を意図的に生み出す手立てを教師が講じ、子ども同士が思考を深め合いながら表現し、発信していく学びを積み重ねることは、これからの社会をより豊かに生きていくための力を育むことにつながると考える。以上の理由から、本研究ではこの主題を設定した。

3. 研究仮説と視点

表現及び鑑賞活動を通して、「心うごく瞬間（とき）」を設定し、他者と協働しながら思考を深め、学び深めあう場面をつくる。これによって、音楽に対する感性を豊かにするとともに、表現する力や発信する力を伸ばすことができ、音楽に親しんでいく豊かな心を育てることにつながるのではないかと考える。

「心うごく瞬間（とき）」を求めるために、子どもの感性を育むための手立て

①音や音楽との出会わせ方の工夫

子どもがまず興味・関心をもつ（＝心うごく）ような場面設定

②他者と協働する喜び（学習形態の工夫）

音を合わせたり聴き合ったりして心を動かし、音や音楽を他者と共有する場、意見交換したり認め合ったりして、深い学びの場を設定

③発問や評価の在り方（学習展開の工夫）

子どもの思考の流れに沿った発問や的確な見取り

④授業構成や指導内容の焦点化

指導内容や観点を絞り、見通しをもった単元・授業を構成

Ⅲ. 研究内容

音楽的な見方・考え方を働かせ、表現する力を育む指導の在り方の研究を行う

○第二次研究協議会での中心サークルによる授業を通して、研究主題に迫った授業をつくり、指導方法を深める。

- ・個別最適な学びと協働的な学びの実現
 - ・思考力、判断力、表現力の育成
 - ・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
 - ・ＩＣＴ機器の有効活用
- ６月頃に講師を招き、実技理論研修会を行う。

Ⅳ. 研究方法

1. 研修会

- (1) 本研究の進め方に基づいた実技理論研修会を開催する。
(開催場所・内容は、令和９年度の第二次研究協議会開催市町村部会を優先する)
- (2) 今次研究に有効な教材や指導事例の紹介、部会員の声や問題提起を盛り込む等、より開かれた部報「石音」の発行に努め、共通理解を図る。

2. 個人、市町村部会

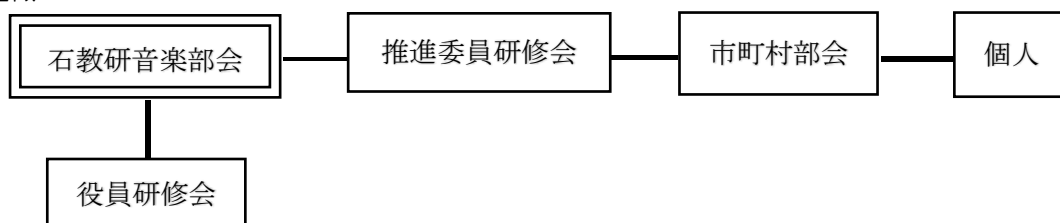
- (1) 研究主題解明に向けて研究組織・研究の進め方について考えて確認しあい、年間構想を立案する。
- (2) 市町村独自の実技研修会や学習会や、授業研等を位置付けて、研究主題の実践・検証を行う。また、その資料は、全会員に環流する。
- (3) 協働研究の利点を生かし、実践検証した研究の成果を市町村ごとに一つのレポートとしてまとめ第二次研究協議会で発表し、全体で交流し検証する。市町村研究推進委員は、第二次研究協議会に向けて、部会員一人一人の役割を明確にし、部会員が研究意欲を高め、推進できるよう連絡を密に行う。

3. 専門部会第二次研究協議会

- (1) 第二次研究協議会開催市町村部会においては、公開授業や学習会、課題解明に結び付く研修の場を事務局と連携を取りながら設定する。そのために、開催市町村部会が中心になって研究グループを組織し、協働研究を進める。各推進委員も公開授業等の共同研究者として、推進委員研修会の時に指導案を検討する。
- (2) 市町村部会でまとめられた研究の成果を各市町村でレポートとしてまとめ、発表の方法を考え全体で交流し、検討する。

Ⅴ. 研究体制

1. 組織



2. 各役員の業務分担

- | | |
|--------|---|
| ○部 長 | ①部会業務全般（渉外業務も含む）
②あいさつ業務、巻頭言４月・２月
③「石教研情報」の原稿作成
④第二次研究協議会のアンケートに対する見解作成
⑤講師対応 |
| ○副 部 長 | ①研究計画立案、全般的研究方法の検討
②ホームページ、Google Workspace の管理 |

○研 究 員	③第二次研究協議会の小・中合同合唱交流会の計画
	④第二次研究協議会のアンケート作成・集約
	①『石狩の教育』の執筆，小・中交代で研究員研修会に出席
	②実技理論研修会のアンケート用紙作成と集約→終了報告書の作成→センターと事務局長へ送付
○教育課程委員	③第二次研究協議会での小中学学習会・市町村交流の計画
	④指導案の書き方（小学校），レポート作成について（中学校）の案内発出
	①『石狩の教育』（教育課程に関する部分を作成し，研究員に提出）
○事 務 局 長	②実技理論研修会の記録
	③教育課程の見直しと作成
	①役員・推進委員との連絡・調整
	②部報の原稿の集約・作成
	③各研修会の案内・資料作成
	④石教研事務局との連絡・調整
	⑤実技理論研修会に向けた講師との連絡・調整
	⑥実技理論研修会，第二次研究協議会の開催要項の作成
	⑦実技理論研修会の出席簿・参加者名簿，旅費支払い依頼書，予算要望書の作成
	⑧実技理論研修会，第二次研究協議会の会場校との連絡・調整
	⑨実技理論研修会，第二次研究協議会の借用書・礼状の作成，発送
○事 務 局 次 長	⑩第二次研究協議会の小中学学習会で使用する機材の確認
	⑪第二次研究協議会の総括
	⑫専門部会研究アンケート作成・集約・提出
	①一般会計
	②研修会の記録作成
	③研修会準備（旅費等）

* 第二次研究協議会の前日準備については，基本的に全役員参加で行う。

Ⅵ. 年間計画

月	研修会等 （部報「石音」は適宜発行）
4月	市町村研究協議会・推進委員研修会①・役員研修会①・専門部会第一次研究協議会
5月	推進委員研修会②・役員研修会②
6月	実技理論研修会・役員研修会③
7月	役員研修会④
8月	推進委員研修会③
9月	市町村研究協議会・役員研修会⑤
10月	拡大推進委員研修会④・専門部会第二次研究協議会・役員研修会⑥⑦
11月	
12月	役員研修会⑧
1月	役員研修会⑨・推進委員研修会⑤
2月	市町村研究協議会
3月	

（文責 大城 裕貴）